

豊かなる詩的世界―『雪麻呂』小論―

鈴木 竹志

小島ゆかりさんが第十五歌集『雪麻呂』およびこれまでの短歌による創作活動の深化を理由に、第三回大岡信賞を受賞した。歌人としては初めての受賞である。大岡信氏が朝日新聞に長く「折々のうた」を連載してきたことから分かるように、詩歌に対して常に温かい眼差しを注いで来られた氏の名前を冠した賞を、小島ゆかりさんが受賞されるのは、私たちコスモスに拠る者にとっては、とても嬉しいことだ。なぜなら、宮柾二先生は、コスモスの出発時より、コスモスの歌が、短歌という狭い範囲で完結することをよしとせず、常に詩歌という広い枠組みの中での短歌のあるべき姿を追求されてこられたからである。

詩歌は言うに及ばず、芸術の他の分野の作品が対象となっているこの賞を、

『雪麻呂』という歌集が、選ばれたことに大きな意義がある。この歌集の短歌は、短歌という枠には収まらない、詩的要素に溢れている短歌なのである。詩的世界の広がりを含むしている短歌なのである。詩的要素の一つとして、まず音楽性が挙げられる。次に大胆な比喻によって、イメージを豊かにし、想像の幅を広げていることである。言葉によって生み出される世界の広がりや深まりがまずの。では、その詩的世界の広がりや深まりについて、『雪麻呂』の歌を読みつつ検証してゆきたい。まず「キャラバン」の一連の歌から。

天道虫は小半球のからだもて大半球の夜を知るべし

ひかり濃くたままるまひるの薔薇園に
ひとつひとつの棘生きてをり

鳴りながらかがよひながら浮く蜂の
たまゆら大きな日輪となる
蜂を見る眼をみひらけばじんじんと
爬虫類めく、眼のみがしばし
一首目、天道虫を「小半球のからだ」

と表現したうえで、一気に「大半球」へと飛躍させる。「大半球」は北半球のことである。小さな昆虫から地球ということでもない大きなものへとイメージを転換させてゆく言葉のアクロバットに誰しも驚嘆せざるをえないであろう。二首目の薔薇園の歌では、「ひ」の音を多用して、リズム感溢れる短歌となっている。薔薇の棘が眼前に迫ってくるような錯覚すらおぼえかねない。三首目の歌では、羽音を鳴らしてホバリングする蜂が、何と「日輪」へと変身してしまうのである。あまりに劇的な変化に読者は呆然とするしかないだろう。そして、四首目では、蜂を見ている作者の眼が、時が経つにつれて、爬虫類の目のように変化を遂げて、獲物を見据えているという歌なのである。メタモルフオーゼという言葉がこれらの短歌に当てはまるかもしれない。自身の周りの存在が次々に変化を遂げてゆくのである。この幻視とも言うべき世界を出

現させるところに、小島ゆかりの短歌の
妻みがあるのではないかと思う。

この歌集の題にもなった「雪麻呂」の
一連の歌にも触れたい。

冷えわたる夜の澄みわたるかなたよ
りもうすぐ天の雪麻呂が来る

雪がもうすぐ降ってきそうだというこ
とが詠まれているだけの歌なのだが、実
に味わい深い一首となつている。「わた
る」の繰り返し、「る」の音の多用、こ
れらによつて穏やかなリズムが生じる。
そして、「雪麻呂」という造語になぜか
親しみも覚える。

白眉の垂眉のよき翁顔たまゆら浮か
び夜の雪くる

「白眉」の次に「垂眉」をもつてきた
のも、リズムを配慮してのことだろう。
「白眉」も「垂眉」もやはり造語であろ
う。そして、「白眉の垂眉のよき翁」こ
そ「雪麻呂」なのである。雪というもの
に親しみを込めて、雪を「雪麻呂」と命
名するのである。

これらの歌を読んでいると、何とも言
えない懐かしさが湧いて来る。幼いころ
に戻ってしまったような気持ちになる。
幼い頃、空を仰いで、雪が降ってくるの

を待ち望んでいた。そんな遠い昔の自分
に思いを馳せることができる。白秋の童
謡の魅力にも通じるものが、この一連の
歌にはあるように思えてならない。もち
ろん『雪麻呂』は、白秋短歌の系譜に見
事につながる歌集なのである。

『雪麻呂』 作品抄

日ざかりをゆらゆら母とわれゆけりたつ
た二人のキャラバンに似て

ひかり濃くたまるまひるの薔薇園にひと
つひとつの棘生きてをり

ふくよかな熱き空気が脚に触れ盲導犬と
すれちがひたる

病室の脇道けふは油照り 貌見ゆるまで
揚羽近づく

ブランコは乗るより降りるむづかしくお
ツとツと さくらももこさん逝く

白花の秋陽にかわく曼珠沙華をりをりは
髑髏のごとし

ゆれいでてやさし野紺菊、野紺菊そこに
隠るるならずや狐

冷えわたる夜の澄みわたるかなたよりも
うすぐ天の雪麻呂が来る

通俗は低俗ならずいくつかのたつたひと
つの恋ありしこと

おほぞらの奥からかわが奥からかぎんの
叫びのとんぼ湧き来る

台風の夜は明けつつ雲や草や聞こえない
母の耳も飛ぶなり

晩秋のこんな明るい街に来てハシビロコ
ウのやうに佇む

鳩どりは水にもぐりてみづになり浮き出
でてみづは鳩どりになる

満月をとりだすごとし大玉の月夜野林檎
つめたく重く

丘のある車窓風景みるうちにこころの丘
にしろい山羊をり

消え失せし白マスクそこに咲きをり駅の
広場の大き木蓮

介護なほつづき 大きな黒い魚ゆらりと
胸にうごくことある

てのひらに豆腐をのせてよみがへる古墓
石のうらのつめたさ

そして秋 空もひとつの武蔵野に早馬の
ごとき風の音する

ぶだうパン食べて豆大福食べてわたしは
たぶんまだ大丈夫

(抽出・水上比呂美)